
パンダヒーロー 《自己解釈》

空音悠都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダヒーロー《自己解釈》

【Nコード】

N6078R

【作者名】

空音悠都

【あらすじ】

とある少女と裏の世界の話。

ハチP様のパンダヒーローの自己解釈小説を書かせていただきました。あくまで私自身の自己解釈なので、自分のイメージと違う場合がございますのでご了承くださいませ。読んでいただけると嬉しいです（＊＼＼＊） 皆様に愛されるような小説になれるように努力します！

いちわめ

廃材や何やら、ゴミが散乱している裏通り。そこには千鳥足で歩いている男や意味もなくケラケラと笑い叫ぶ女共がいる。風があまり流れてこないこの地に充満している煙を吸ってしまえば、もう表通りには戻れない。

——1人1人狂った裏市・・・

それがこの地につけられた名だ。そこに1人の緑髪の少女がふらりとやってきた。ショートカットの緑髪を揺らしながら、人の間をすり抜けて歩く。つぎはぎだらけのボロボロの服、同じような帽子を深く被って、その瞳は虚ろ。16ぐらいだろうか？肌は白く、痩せていて、目の下には隈。

そんな少女はある男の目の前で足を止める。そいつは麻薬の売人であり、薄汚れたこの場所に似合わない高級そうな黒スーツに身を包み、体に塵ひとつついていない。

「また来たな」

売人はにやりと笑う。しかし少女は一ミリも表情を変えずに無言で立っている。

「メグ・・・だったっけ？今日は一体何の用だ？」

メグと呼ばれた少女はポケットから空になった小さな半透明の袋を取り出して、男の目の前でひらひらとさせる。

「一つ頼むぜ。お願いだ」

売人はその袋を掴み、メグを睨む。

「金は？」

メグは少し目を泳がせて、ポケットの中を探す様な仕草をするが、売人にはそこに財布が無いという事が予想できた。

「・・・金がねえならやれねえな」

メグの表情が少し変わり、泣きそうな表情となった。メグと知り合って何ヵ月も経つが表情を変えたのを見たのは初めてかもしれない。彼女は縋る様に男のスーツを掴む。

「お願いだ・・・苦しいんだよ・・・」

その声には感情が無く、何でもないような声に聞こえてしまう。売人は、メグの手を優しく自分のスーツから外した。そして、にっこりと笑って思いつき彼女の頬を殴った。何が起こったか分からないという様な表情をして頬を押さえるメグを冷たい目で見下して、氷のような冷たい声で吐き捨てる。

「うるせえな。金がねえンだったら売る価値がねえンだよ。俺達をなめんじゃねえ、クソガキ」

メグはギロリと彼を睨んで、口の中にある血の混ざった唾液を吐き捨てる。葉が抜け始めてイライラする。しかし、それを抑えるための薬と金はない。このままだと理性が無くなり、表通りにも、”現実”にも、何処にも行けなくなる。

————どうやって金を作ろうか・・・

「やっぱりバイトかな・・・」

メグはフラフラと売人に背をむけて歩き出す。バイトは長続きした経験がない。基本的何か問題を起こしてクビになってしまうのだ。それとも、そろそろ改心でもしようか・・・

ニュースとかで今の時代はリハビリを受ければ治ると聞いたけど・・・

「おい、メグ」

売人が急に声をかけてきたので、少しだけびくっとなってしまった。振り返るとニヤついた彼が手招きをした。再び彼のもとへ歩いて行く。すると、彼は思いもよらない一言を発した。

「オピウムの錠剤1粒ならやってもいいぞ」

「本当か!？」

メグの目が丸くなり、嬉しそうに表情を緩ませる。

――しかし、世の中そんなにうまくいかない。

「但し、1つ条件がある」

ゾクツと背筋に悪寒が走った。

「俺の頼む仕事をしてきてくれ。その報酬として、1粒やってやる」

嫌な予感がした。

「・・・で？その仕事っていうのは？」

「俺の言う人間を殺してきてくれ」

だろうと思った。

薬は使ってはいるが、殺人なんてまだやったことがない。

メグは身長差が10センチ以上もある男の胸ぐらを掴んだ。

「私に殺人をやれってか！？」

男は溜息をついて、彼女を睨んだ。

「じゃあ、やれねえな。大切な薬の代金の代わりに人1人殺すだけでいいってんだ。安いもんだろ？」

頭に血が上る感覚がした。思わず、彼を殴ろうとしたがいとも簡単にかわされてしまう。そして、両手を掴まれ、封じられてしまった。

「命なんて安いんだよお。簡単に金で買えるんだぜ。臓器なんて何千万としかなんねえし。安すぎて笑えてくるよなあ！価値の無い人間を殺した方が世の中のためだろおお？」

脳裏にとある嫌な記憶が甦る。

苦しい記憶、アイツ等は世の中のゴミだと思っていた。あーゆー奴がいなくなったら自分みたいな人も少なくなるかもしれない。

自分の快樂

と

他人の命

どちらを取るかと問われれば、ヤハリ・・・

「わかった引き受ける」

自分の快樂を取るだろうね。

「だよな。お前はそういう女だ」

初めて見る男の嬉しそうな笑顔。

・・・なんもときめいたりしないが・・・

これが、後のパンダヒーローの始まり。

いちわめ（後書き）

がつ・・・頑張ります！

にわめ（前書き）

残酷表現あり。

苦手な人は見ない方がいいかもです（―――；）

にわめ

メグは溜め息をついて、首を傾げる。

「んで？誰を殺せばいいの？」

「コイツ。ヨロシクな」

一枚の紙切れを渡し、彼は何処かへいなくなってしまった。その紙には、ある女性の写真と、その女性の詳細が書いてあった。メグはその紙を右手に、丁度近くにあった金属バッドを持って歩いて行く。

人殺しなんて自分がするものではないと思っていた。多分、この世界で生きている人全てがそう思っているだろう・・・きっとそれは違うのだ。ブラウン管の向こうで視た映像も”現実”なのだ。殺すとか殺されるとか、それとはいつも背中合わせ。

夜の街はネオンで眩しくて、人の声は耳障りなほど煩い。メグは金属バッドを黒くて細長いバックに入れ、フラフラと歩いているが、自分のことしか考えていない人々は気にせず歩いて行く。紙に書いてあったとあるホテルに行くと、丁度仕事を終えて店を出るところだった。

彼女の職業は売女。

今も昔も無くなることの無いこの職業。まあ、世の中で一番簡単に高く売れるのは体だし、意外と売女をしている人は結構多い。

話がずれたが、この女は、麻薬を買って、その買った倍の値段で他の人に売っているらしい。

自分は女だから、彼女に簡単に声をかけれない。どうやって声をかけようかと考えている時、その女の持っている高級そうなハンドバッグが目に入った。

(予想付いた・・・)

心の中で呟き、にやりと笑う。彼女のところへ、徐々に歩くスピードを速くして近づく。そして、通りすがりに彼女のハンドバッグを掴み、ひったくる。

「あ！待ちなさい！！」

周りの人たちは彼女の声すらも無視する。まあ、彼女も他の人に声をかけようとするわけもないのだが・・・

予想通り、女は1人でメグを追いかけてくる。走って走って、薄暗い路地に誘い込む。近くにあったゴミ箱にそのハンドバッグを投げ入れて、金属バッドを取り出して彼女を待ちかまえる。彼女の赤いヒールに黒い露出度の高いワンピースという恰好からして、メグに追い付くには少々時間がかかりそうだ。一応、彼女が自分のことを見失わない程度にスピードを落としたつもりだが・・・見失っていないだろうか？

数分後に息を切らしながらやってきた。

「アンタ・・・何のつもりよ！」

睨みながら近づいてくる女に、営業スマイルをする。

「私の依頼主の命により」

金属バッドを背中に隠したまま、自ら近づく。

「アナタを・・・殺します」

すばやく、さらに思いつき金属バッドを女の右足に叩きつける。バギッと骨が折れる音がした。骨って簡単に折れるみたいだ。女は

イタイイタイと泣き叫んで、折れて変な方向に曲がった足を見つめる。そして、赤くなった瞳で縋るように見つめてくる。もう一本の足にも、思いつきり金属バッドを叩きつける。ああ、変な格好。

女は何もできない。彼女の声は人々の雑踏で消える。

「気絶すんじゃないぞお」

彼女の右手をグリグリと踏みながら、耳元で囁く。気絶しそうな彼女の眼はもう虚ろになってきているが、もう一度痛みを与えれば元の縋るような眼に戻った。人を痛めつけるのってこんなにも快感だったのか・・・イタイイタイと壊れたラジオの様に言うのもただん耳障りになってきた。

「ああ・・・耳障り」

さっきまで地面につけていた右足を、丁度彼女の肺のあたりにのせて、体重をかける。

「あ・・・あぐっ・・・」

必死にメグの足をどけようとするが、力が入らない左手は振り払えばすぐに取れてしまう。彼女の瞳からは涙が流れ、口からは唾液がだらだらと流れる。なんて滑稽だろう？笑いそうになるのを必死でこらえながら、さらに体重をかける。

「あう・・・っぐ・・・アンタ・・・いった・・・なんな・・・」

んゝっとメグは少し考えて、金属バッドを再びきつく握り、振り上げる。そろそろ、飽きてきた。女は短い悲鳴を上げる。先程の質問に、メグはにっこりと笑って答える。

「私は・・・誰でしょう？」

思いつき金属バッドを女の頭に叩きつける。肉の潰れる音と、骨が碎ける音、血の匂いなぜかとても心地いい。快樂殺人者の気持ちがわかった気がする。何度も何度も振り下ろし、彼女のピンクで長い髪は、美しい深紅へと変わった。

「ああ・・・死んじゃった」

さっきまで痙攣していた彼女はもう動かない。ねっとりとした血が金属バットにべっとりと付いている。その血を服で拭うが、服にも血が付いているため逆効果。顔についた血を早く洗い流したい。今度から拭く用の布を持ってこないと・・・

「お？ やってくれたか」

路地の闇の中からあの売人がやってきた。

「オピウム頂戴」

血で染まった手を伸ばすと、彼は溜め息について白いタオルを渡してきた。メグが不思議そうにタオルを見つめっていると、再び彼は溜め息をついて、タオルを奪い、強引にメグの顔を拭き始める。

「そんな顔で表歩いてみろ。すぐに警察行きだぞ」

世の中には厄介な犬が沢山いたことを忘れていた。それより・・・

「オピウムを早く！」

男のタオルをどけて、言う。彼は面倒くさそうにポケットをあさり、白い錠剤を取り出して、メグの口の中に放り込んだ。

「明日も同じ所で待ってるからな」

薬物特有の快感の中で聞いた声。彼はゴミ箱から女のバッグを取って、闇の中に消えた。まだ少し理性が残っているうちに、この場所からいなくなるといけない。金属バッドを黒いバックに入れて歩き出す。

覚束ない足取りで歩く少女も、闇の中に消えた。

そこ残されたのは血のにおいと1人の哀れな女の死体だけだった・

・

さんわめ(前書き)

かなり長くなりました(――;)
 R12じゃ無くなってるかもです・・・

さんわめ

次の日の夜・・・

昨日と似たような服を着たメグが再び裏通りにやって来た。少々違うところは新しい服ということだ。ゴーグル付きの帽子も新品であり、黒いタンクトップも新しい。ちなみに長袖で軍服のような上着は腰のあたりに捲いている。ズボンも軍服のようで、だぼっとしている。黒いブーツにズボンを入れていて、一見軍人のように見える。この服はメグが1人暮らしをしているボロアパートに朝届けられたものだ。

「よお。俺のプレゼントした服を着てくれたようだな」

あの売人の声がし、振り返る。

「探す手間が省けた・・・新しい仕事は？」

急かすメグをなだめるように、肩に手を置いてきた。

「それより、昨日はご苦労サン。“パンダヒーロー”ちゃん」

「は？」

“パンダヒーロー”というのはどういうことだろうか？

反応に困っていると、彼が説明してくれた。

「昨日の殺人を見た同業の野郎がいてさあ、そいつがお前を見て思いついた通り名だよ」

昨日のあれが見られていたのか・・・何たる失態・・・
ん？パンダヒーロー・・・ああ・・・そういうことか。

メグの肌は青白い。さらに目の下の隈。まるで白い毛で目の周りが黒いパンダの様。それで、売人にとっての“ヒーロー”か。

「正義か悪か・・・いや白か黒か曖昧な“正義”のヒーローだな」

メグは嘲笑うような笑みを浮かべ、鼻で笑う。そして、近くにあった小石を蹴る。

「噂は、一気に広まってるぜ。後で仕事が生殺にされるだろうよ」

笑う目の前の男にイライラしながら、腕を組む。

「で？さっさと仕事とオピウム頂戴」

男は面白くなさそうに地面にペツと唾を吐く。そして、ポケットから一枚の紙切れとカプセルの入った小さな袋を取り出す。それを奪い取る様に取り、見つめる。

「そのカプセル、役に立つと思うぜ。それと、オピウムは仕事が終わったんだ」

メグは溜め息をついて、左手に持っていた金属バッドを握りしめる。今度の仕事大変そうだ。しかもダーゲット男で、さらに二人組ときた。かなりの重労働だと心の中で悪態をつきながら、仕事場にむかって歩き出す。

「あ、おい」

男に引きとめられ、振り返らずに立ち止まる。

「昨日は同業に見られたが、今日は誰にも見られないようにな」

「ふんっ。一度やった失敗は二度も繰り返さないよ」

それだけ言って彼女はまた歩き出す。男はそれを見送り、彼女の背中が見えなくなるとケラケラと笑い呟いた。

「さあて・・・どうやって殺すか楽しみだな・・・」

金属バッドを入れた黒いバッグを持ったメグがたどり着いたのは、ラブホテルと風俗店が立ち並ぶ場所。ピンク色のネオンが眩しい。なんとも飢えていそうな男どもがスーツ姿で歩いている。やりたいなら恋人とか作って、そいつらとやれよ。なんともこの男どもは哀れで、汚らしい。

メグを見て「おお・・・」とかいいやがる男もいる。

指定の路地（つまりターゲットがよく出没するところ）に入ると案の定、紙に張ってあった写真の男二人がいた。その二人は、とてもかわいらしい若い女性を強姦しているという・・・なんというタイミングだろう。

男二人の汗のニオイと女の生々しいニオイ。

路地に響く、男二人の一生懸命な低い声と女の色っぽい喘ぎ声のハーモニー。

見慣れてるから、別にどうでもいいけど・・・

三人はメグに気が付いていないようだ。男は女の快感ではなく、己の快感を求めているように見える。女は男二人も相手にしているからか、意識は朦朧としているようで、視点は定まっていない。静かにメグはその光景を見つめる。助けもせずにじつと。

「うあ・・・ん・・・あっ！あああ！」

周りの様子とこのニオイからして、かなりの時間こいつらはここで欲を満たしていると考えられる。服と服がこすれる音、淫らな水音。遠い記憶が呼び起こされる。ああ・・・忘れたい記憶なのに。

「んっんっ・・・んあっあっ・・・ふあ・・・や・・・あ・・・」

女はどうとう意識が飛んでしまったらしく、ぐったりとしてピクリとも動かない。勿論、全裸のままです。

「もう意識飛んだのかよ。これからが本番だって言うのに・・・つまんねえの」

コイツ等は依頼主の敵でもあり、女の敵でもあるようだ。

金髪の青年は女の尻から、紫髪の男は女の中から自分のモノを抜いて服を着始めた。その時に二人はやっとメグに気がついた。新たな獲物を見つけたような顔でニヤつきながら、さっさと服を着て、メグを二人で囲んだ。

「君、見てたんだ」

「ええ」

意外と写真よりはかっこいいじゃないか思いながら平然として

いるメグの腕を、金髪の青年が掴む。

「俺等といいことしない？」

メグは色っぽくクスツと笑って答える。

「大歓迎よ。イケメンは大好きなの」

男二人は嫌らしい笑みを浮かべて、メグの背中を押しながら近くのラブホテルへと連れて行った。金属バッドを入れたバッグは適当な言い訳を言って預けなくてもいいことにしてもらった。名前は勿論偽名を使う。ラブホテルの一室に入ると、外のネオンの様にピンクの光が眩しい。

メグがベッドに座ると、二人は早速というようにメグを押し倒そうとした。彼女はそれを止める。

「さっきまで違うヒト相手にしてたでしょ？その人を忘れて私だけを見て欲しいの・・・だから、シャワー浴びてきて？」

涙を少し目にためて、頬を赤くしながら上目づかいで懇願する。二人は少し相談して、先に金髪の男がシャワーを浴びることとなった。

紫髪の男と二人きり。全てはメグの計画通り。

メグは、彼に見えないように、売人からもらったカプセルを口の中に含み、舌の裏側に隠す。そして、紫髪の男の二の腕らへんの袖を掴み、小さな声で、甘えるように囁く。

「ねえ・・・さっきの人に秘密で・・・キスして」

紫髪の男は、にやりと笑って頷く。そして、メグの方からキスを

する。その時、自分から舌を入れて、舌の後ろに隠してあった薬も一緒に彼の口の中に入れた。少し溶けかかっていた、薬自体はメグは口にしていなかった。無理やり薬をのどに押し込むのを、彼は気付かずにメグとの深く濃厚なキスを堪能している。そのキスはメグにとって気持ち悪いこと他ならなかった。しかし、彼は一向に解放してくれない。しばらくして、薬の効果が出たのか、彼がいきなりベッドの上に倒れた。

「やっとかよ」

彼に飲ませたのは即効性で強力な睡眠薬。あの売人からもらったものだ。確かに役には立った。ベッドの上でぐっすりと寝ている男の唾液が口の中にまだ残っていたが、うがいしている場合ではない。金属バッドを取り出して、服を脱いで、シャワールームに向かう。シャワールームの扉を無言で開いて、彼に声をかける。金属バッドは背中では隠して。

「ねえ・・・一緒に入ってもいい？」

「え？全然OKだよ」

嬉しそうな彼。そして、メグは再び彼にこう言った。

「ちょっとシャンプーをとって頂戴」

彼がシャンプーを取ろうとメグに背中を向けた瞬間、メグは金属バッドを振り上げる。

「ばいばい」

シャワールームにグシャつという音が響く。その反動で、彼は壁に額を壁にぶつけた。そう簡単に頭は割れないらしい。彼がうずくまっているうちに、シャンプーを手に取り中身を中身を出して彼の眼に擦り付けた。

「うああああ！目があ・・・目があ・・・」

何処かで聞いたことがあるセリフだなとか思いつつ、何度も金属バッドで彼の頭を殴る。すると、いつの間にか彼は全く動かなくなつた。白い壁のシャワールームに赤い斑点ができた。彼を水をためた湯船の中に入れた。

「あと一人」

シャワールームを出て、ベッドで眠っている男にぺたぺたと近付く。そして、無言のまま彼の顔に何度も金属バッドを振り下ろす。何も叫ばない、しゃべらない、動かない。顔も原型が分からないほどグチャグチャにしてから、金髪の青年と同様に湯船に入れて、カーテンを閉めた。ついでにと、体についた汚れやら血やらをシャワーで洗い流して、髪も洗った。うがいもしていると、ふと幼少の頃の記憶がよみがえってきた。

金属バッドも綺麗にして、服を着る。そして、タオルなど持っていけるものは金属バッドと一緒にバッグに入れて部屋を後にした。帽子を深く被り、何食わぬ顔でチェックアウトを済ます。「おひとりですか？」と聞かれたが、「いいえ、後から来ます。外で待っていると約束したので」なんて言って、外に出してもらった。

外に出ると、あの売人がいた。

「終わったみたいだな」

何故こいつはいいタイミングでくるし、自分のいるところがわかるのだろうか？

「ほれ、報酬だ」

オピウムの錠剤一粒。これでも足りない。ならば、たくさん仕事をするまでだ。

今日は帰り道がわからないため、売人に途中までついて行くことにした。

・・・あの強姦された金髪の女の人はい体どうなったのだろうか？
そんなことを考えながら、メグは売人について行く。

よんわめ。(前書き)

遅くなりました(汗

よんわめ。

オピウムの錠剤のために仕事をする・・・

そんな毎日が続いた。

“パンダヒーロー”は表世界のニュースにまで登場した。

いい意味ではなく、連続殺人者として。

“パンダヒーロー”とは誰なのか？

何のためにやっているのか？

誰も知らないのだ。だから、色々な憶測が飛び交う。

メグは表の世界とはあまり干渉しないため、色々な憶測が飛び交っていることなど知らずに、己の快感のために殺人をする。

・・・金で人を喰う売人はまるでカニバリズム。淡々と仕事をするメグは言葉だけ歌うアンドロイドの様。

世の中には嫌われているパンダヒーロー

売人には望まれているパンダヒーロー

「もう疲れた」

パンダヒーローと呼ばれるようになって早1ヶ月。錠剤一つじゃ足りなくなってきた。仕事も増えてきて、殺人じゃない内容の普通のバイトのようなものもある。相変わらず、仕事の内容については売人に教えてもらっている。

最近では1日では処理しきれない量になってきて、毎日がダルい。疲れも溜まってきているが、オピウムを飲めば楽になる。疲れを薬で誤魔化す。その繰り返し・・・繰り返し・・・

もう日にちすら数えるのに飽きてきた頃、仕事が急激に減ってきた。今までの仕事の3分の1もあるかどうか・・・今まで来ない日にちのを数える方が楽だったのに、今では来た日にちの方を数えた

方が楽になってきた。あまりにも唐突に來なさすぎる。そこまで馬鹿じゃないメグは裏があると考え、売人に詰め寄った。

「仕事が来ないの！どういうこと！？」

彼は溜め息をついて、冷たい瞳で彼女を見る。

「お前さあ、最近仕事のスピードが落ちたらしいな。噂は広まってるぜえ」

にやりと笑う売人。

仕事のスピードが落ちてきている・・・？そんなことはない。いつも時間内に終わらせている・・・

まさか・・・と思つて、メグは男の胸ぐらを掴む。

「デメエツ・・・！！デマ流しやがったな！！」

すると、彼は突然メグを嘲笑うように笑いだした。メグは思わず手を離してしまった。しばらくして、彼がぴたりと笑うのをやめ、メグを睨んできた。

「そおだよ。たった1つの仕事しただけでオピウムが手に入る毎日がつつと続くと思つてたのかあ？」

男の威圧感に尻もちをつく。膝が笑つて立てない。

「お前にもう飽きた。1つのおもちゃでずっと遊ぶと飽きんだろ？それと同じだよ」

男は踵を返し、ひらひらと手を振って歩いて行く。

「じゃあな。パンダヒーロー」

小さくなる背中を見つめる。夜の街の空気がひやりと冷たい。地面にへたり込んだまま、空を仰ぐ。

どうしよう・・・オピウムが手に入らなくなってしまった。

彼女にとってオピウムは命そのものである。それが無くなってしまったら・・・

「あ・・・」

そうだとメグは思いついた。

空を見つめたまま、立ちあがりにやりと笑う。そして金属バッドを握りしめる。

——簡単に手に入る方法があるじゃない・・・

彼女の中で、何かが壊れた。

メグはゴーグルを付けて、走り出す。

走って、走って、夜の街を駆け抜ける。

光など彼女の眼には映っていない。

真っ直ぐ前しか見えていない。

1つの目的地しか見えていない。

彼女はただ走り、向かう。

パンダヒーロー・・・最後の仕事場へ・・・

さいへい(前書き)

最終話です。

さっし

パンダヒーローが選んだ最後の仕事場は、人気のない路地の奥にある地下へと続く階段の向こう。彼女は無表情のまま、堂々と階段を降りる。

降りた先には黒い扉。その前には男が2人。2人はメグに気付くと声をそろえてこう言った。

「「パ・・・パンダヒーロー・・・」」

やっぱり私は有名なんだ。なら知ってるよな？このパンダヒーローがここに来た意味。

メグ・・・いや、パンダヒーローは階段をゆっくりと降りて2人の前に立って口元にだけ笑みを浮かべる。

「どいて」

それは一瞬の出来事。

彼女は金属バッドを振り上げて、2人の男を殴る。さすがに1発じゃ殺せない。もう一発と振り上げたとき、2人の男は拳銃を構える。

拳銃より、彼女の反射神経の方が早かった。

拳銃を持っている手をすばやく殴り、拳銃は空へと舞う。それを見事に金属バッドを置いたパンダヒーローは両手でキャッチし、2丁拳銃を構える。そして、乾いた音を響かせる。

地面は赤黒い地で海と化し、彼女の白い肌にも紅い花を咲かせる。
・・・そう、ここは売人の本拠地。

「お困りならば私を呼んで」

血の海に沈んでいた紅い金属バッドを拾い、黒く重い扉を開く。男と売春婦ばかりのこの場所。パンダヒーローの大好きな匂いが漂っている。そこにいた人々は、一斉にパンダヒーローを見て、ざわめく。

「今お困りなのはメグさんです」

パンダヒーローは走り出す・・・メグのために・・・たじろいている男どもに金属バッドを振り上げる。

「なめんじゃねえええ!!」

1か月しか殺しをしていないけれど、10と時からいる裏社会。殺されそうな時もあった・・・大人数で強姦されそうにもなった。大人数と喧嘩するのはもう慣れている。地下にある酒場にこだまするのは、哀れな少女の叫び声と男の叫び声、頭が割れる音。三遊間を狙って走る哀れな少女。

たった30分しかたっていないのに、男どもは頭から血を流し、足や手は変な方向に曲がっている。一目見れば死んでいることが分かる。

パンダヒーローは傷だらけ。殴られた痣が痛々しい。

店内にいた売女が震えながら泣いている。そして、パンダヒーロー向かって数々の暴言を吐いて雨で震える猫のようにカタカタと震えている。感情制限のできなくなってきている彼女は、理性が残っているうちにふわりと笑って彼女たちに言う。

「ここから消えな。じゃないと・・・殺しちゃうよ」

売女は店内に悲鳴を響かせて、外に走っていなくなった。

しんっと静まる店内。すると、奥の扉がゆっくりと開いた。その扉を開いたのは……

「やあ。メグちゃん」

アイツだった。

相変わらずニヤニヤしていて、気味が悪い。パンダヒーローは何も言わず地面に転がった拳銃を拾ってから、走って体当たりをして彼を押し倒す。そして両手両足に拳銃で風穴を開けて、空になった拳銃を適当に投げ捨てる。彼は叫ばない。ただ冷や汗を浮かべるだけで、苦痛の表情を浮かべるだけで、救いの声も……何も叫ばない。

ああ……なんて面白くない男だろうか……

彼女は冷たい目で彼を見下し、金属バッドを振り上げてから口を開いた。

「メグさんの依頼でやって参りました。パンダヒーローと申します。何かメグさんに伝言などありましたらどうぞ」

「ん……メグのこと好きだったってことかな」

弱弱しく笑う彼。

パンダヒーローは微笑む。

「お伝えしておきます。ではお名前をお教えください」

彼は血が止まらない手をゆっくりと伸ばし、パンダヒーローの頬に触れる。

「カイトだよ」

それを聞いて彼女は頷き、金属バッドをさらに振り上げる。

「では、さようなら」

ぐしゃつと彼の顔が潰れる。

何故だろう？ 涙が流れる。胸が苦しい。これでいいじゃないか・

・彼女の依頼は達成した。

遠くでパトカーの音がする。ああ。このゲームはもうどうしようもない。始まりはあるけれど終わりはない。リセットなんてものもありはしない。一人一人確実に消えていった売人たちの正義のひー炉は正義と悪の区別のつかないまま、この物語を終わらせようとしている。

彼のポケットからオピウムの錠剤を取り、ポケットに入れる。さらに、カイトが出てきた扉を開くと、数多の薬が置いてあった。オピウムだけを取り、再びポケット入れた。入口に歩いて行く時にカイトを見た。彼はピクリとも動かない。

「サヨナラ。そして・・・」

そっと彼の耳元で言う。

「告白で動揺すると思ったかあ？ ばあか」

高らかに笑う彼女はもうカイトのことなど信用していなかった。

この涙は、やっとでオピウムを手に入れるという喜びから。胸が苦しいのは、薬がきれたから。

オピウムの錠剤を飲みながら外に出ると、そこには赤い光がうじやうじや。蜘蛛の子のようにわさわさと。売女が何か叫んでいるのだが聞こえない。ああ、あいつらが110番したのかしやがったの

か・・・あの時・・・

コロセバヨカッタ

「おとなしくしろ！パンダヒーロー！！」

ああうるさいな、ワンコロ。ノイズみたいな叫び声を言わないで
おくれよ・・・耳障りなんだよ・・・人の声も全て雑音だ。うるさ
いうるさいうるさい。

・・・そうか・・・本当の最後の仕事はこっちなのかあ・・・
けらけらと笑うパンダヒーロー。

「そうだよ。私がパンダヒーロー！！」

ヒーローと名乗るには、とても恐ろしい姿。血まみれの少女が、
赤い金属バッドを握りしめて走り出す。金属バッドに新たな赤を加
えながら突き進む。彼女にとって人の悲鳴がとても心地良い。走っ
て赤い光から逃げる。後ろからの声なんて気にするな。

パンダヒーローは夜の街を駆けて行く。

ーパンダヒーローの行方は誰も知らない。

パンダヒーローは誰？

パンダヒーローとは一体何？

白黒ハッキリしない正義のヒーロー。

夜の街を駆けて行っても

“彼女は決して何処にも行けない”

とある場所のとあるラジオ。それに耳を傾ける誰かさん。

ノイズだらけのラジオの言葉は断片的。

《ザー・・・県の・・・で・・・歳の女性が・・・ザー・・・殺・・・
れました・・・その・・・は・・・メグさん・・・で・・・死・・・
は・・・だそ・・・です・・・警・・・は・・・です。以上で・・・
》

ラジオはそこで消えてしまった。

ツインテールの緑髪の少女は、クスツと笑いラジオを蹴飛ばす。

「お嬢様。早く行きましょう」

赤髪でショートカットの女性に促され、彼女はにっこりと笑い頷き応える。

「ええ」

美しい2人は、彼女たちに似合わない夜の街を後にする。歩きだす時緑髪の少女は振り返り、壊れたラジオの横に置いてある血まみれの金属バッドにこう言った。

「さらば一昨日パンダヒーロー」

さいご(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございました。

自己解釈であるため皆さんと違う解釈もあると思います。

まだまだ文章などが未熟者なので、これからさらに向上目指して頑張ります。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078r/>

パンダヒーロー 《自己解釈》

2011年7月3日17時18分発行